

I. はじめに 感性がゆさぶられる

釈迦堂遺跡博物館は、甲府盆地を一望に見渡す扇状地のほぼ中央の、小高いところに位置している。現代の子どもたちの顔写真が、壁面いっぱい大きく映し出された部屋。そして、次には、出土した180点を超える展示品の土偶の顔が並んでいた。あどけない顔、困ったような顔、笑っているように見える顔、目ばかりが大きい顔、おどけたように見える顔、どれも現代の子どもの顔とだぶり、一万五千年以上前の人が、時を越えて、とても新鮮に映った。いったい、だれが何のためにこのような土偶をつくったのか。まず、教師の感性がゆさぶられた。そして、これは生徒に示し、一緒に考え合いたいと思った。

謎が多い 釈迦堂から出土した多くの土偶は、ばらばらに割られ、捨てられている。胴体部分と顔は切り離されて、中にはていねいに埋められていたものもある。土偶は女性であること、そして、弥生時代にはつくられなくなっていくことなど、土偶には、なぜ、というものがたくさんある、未だ謎は多い。今とは全くかけ離れた厳しい環境の下で、人々はなぜ土偶を作ったのか。正解がないからこそ自由に話し合いができ、どんな生徒でも授業に参加できることになるだろう。研究の成果をもとに今わかっている史実から、想像力豊かにロマンを広げ、人々の願いを話し合っていくことは、かぎりなくおもしろいことではないだろうか。土偶の表情豊かな顔から、目の前の生徒たちは何を受けとめるだろうか？時を越えて、歴史の中に自分を映し出しながら、その時代を生きた人たちに、どう気持ちを寄せることができるだろうか。そんなことを考えながら、授業へとつながっていった。

II. 私のやりたい授業

* 1つにしぼったテーマで自由に話し合いたい。

* 答えはない、見えないものを考えることで想像力を豊かにふくらませたい。

* 疑問を大切にし、歴史像や時代像を、生徒自身がつくっていく主体として学びを獲得させたい。

* 時代を生きた人々の姿に共感できる知性と感性を育てたい。

それは生徒を「教え込む対象」とするのではなく、「主体的な個人」として育てることだった。

中学一年生の最初の授業では必ず、生徒に社会科が好きだったか、嫌いだったかという感覚的なアンケートをとる。嫌いの理由は毎回、「覚えることがあるので嫌い」、「漢字ばかりでいや」、「ノートをたくさんとり、ついていけない」「先生がだらだら話し、眠くなる」と言う。どんな授業が楽しみか、聞くと、「先生と生徒と一緒に考える授業」、「楽しくみんなでいろんな意見を出し合いたい」、「みんなで考えながら楽しく学んでいきたい」、「みんなで意見を出し合って、みんなで答えを出す授業」という。

生徒の「社会科が暗記モノ」という常識を解かなければならないと思うし、教師こそ本気で、生徒を「知識を伝える客体から、自分で考え、学ぶ主体へ」と、とらえることが求められる。主体として生徒は、話し合いの授業を求めている。話し合いは大きく構えなくていい。一人の生徒が質問してきたことを、生徒に聞いてみたり、どうしてそう思うのか聞いて、もうそれが話し合い授業だと思う。

原始・古代は特に定説がなく、いろいろ疑問も出やすい(どの時代でも、研究・検証された定説はあるが、絶対ではない、変わりうる)。旧石器時代、野尻湖でゾウとたたかう授業で、「どうしてこんな石器で、あの大きなゾウとたたかえるんですか？人間がやられなかったんですか？ゾウって食べたんですか？」とだれでも聞きたくなると思う。それを受けて、教師もその謎と一緒にわくわくしながらかかわっていけばいい。ゾウに勝てそうな方法を、たくさん出して話し合わせればいい。生徒から謎を引き出すこと、謎解きを見守り、時として史実を示し、援助するのが教師の仕事となるだろう。

Ⅲ. 授業「縄文時代に生きた人たちは？」（3時間扱い）

1. **1時間目**「縄文時代の食卓」・・・生徒を驚かせよう！

T「前の時間、縄文時代のことがわかる場所をここでやったけれど、なんというところだったか覚えている人いるかな？」

S「福井県の鳥浜貝塚」

T「鳥浜貝塚をもとにして、描いた絵が教科書にある。見てみよう。」

T「今までの旧石器時代では、見られなかった（なかった）ものを探し、それをノートに書いてみよう。」
 竪穴住居、丸木舟、網、縄文土器、釣り針、貝塚などで出たが、ここでは獲物をかついでいる人に注目させた。

T「人がかついでいる動物は何だろう。」

S「シカ」

今までの道具である、やりではなく、すばしっこい小動物、鳥も捕らえられる弓矢の発明に注目させた。

T「1万年前に食べていたもの、どうしたらわかるだろうか？」と発問し、NHKビデオの『鳥浜貝塚は語る』を7分に編集したものを視聴した。化石化した糞石を切り、顕微鏡でのぞき、食べ物を探るという科学的な調べ方を知らせ、考古学の一端に触れさせた。生徒たちは固唾をのんで見守り、驚きの声を上げた。

T「縄文時代、人々は、どんなものを食べていたのだろうか？」

<縄文時代の食べ物の表>

魚類	コイ、ナマズ、ウナギ、フナ、イワシ、 ブリ、マグロ、カツオ、タイ、フグ、サメ、 サワラ
貝類	タニシ、カワニナ、カラスガイ、 シジミ、アカガイ、カキ サザエ、アワビ、ハマグリ、
ほ乳動物	イノシシ、シカ、カモシカ、サル、ノウサギ、 イノシシ、タヌキ、ツキノワグマ、アナグマ、 オオカミ、ヤマネコ、アシカ、オットセイ、 テン、クジラ、イルカ、シャチ
木の実など	ドングリ、クルミ、クリ、ブドウ、イチゴ、 ヤマイモ、ヒシ、ミツバ、ゼンマイ、フキ、 ヒシ、ユリネ
鳥類	カモ、オオハクチョウ、ウミウ、ワシ
その他	ヒョウタン、シソ、エゴマ、アズキ、ウリ、 ゴボウ、

ここで、資料を見せ、食べ物の例をゆっくり見させた。拡大コピーでも提示した。生徒はまたここでも驚き、交流しあった。

食べ物はおよそ何種類くらいあったか？」と予想させた。→4択。577品目で、予想を大きくくつがえした。土器の利用法も考えさせた。煮る。ゆでる。保存する。沸かす。などに使ったことを確認した。

T「縄文時代は、どんな時代だったんだろう？」という問いに、生徒の中から「平和」「楽しそう」「満足」「ぜいたく」「気楽そう」「幸せそう」「ストレスなさそう」などの声があがった。その理由をノートに書かせた。

しかし、高い乳児死亡率、15歳まで生きた人の平均余命約16年、骨の中に飢餓線がみつかったなどから、予想を再考させていった。

T「どうして早く亡くなるんだろうか？どう

して飢餓線ができるんだろうか？」

豊かさの一方で、食料不足やきびしい環境の中で生き抜いた人々のことを想像させた。

2. **2時間目**「土偶をどんな気持ちで作ったのだろうか？」

T「縄文時代の人々が作った土偶を見て下さい。」

S「えっー。」「かわいい。」「なんだ、目が大きい。」「口が小さい。驚いているようだ。」

そんな声をあげる生徒たちに、たくさんの土偶の顔を、大きくカラーでじっくり見せた。子どもたちのこの驚きが、たまらなくおもしろく、楽しい瞬間である。土偶のいろいろなポーズも紹介した。

T「釈迦堂遺跡を始め、全国各地からこのようなたくさんの土偶が発見されている。ばらばらに割られて、発見された土偶が多い。なかにははいねいに埋められたようなものもある。いったいどうしてこのような土偶をつくったんだろう？」

この問いに、生徒たちは一瞬、沈黙した。発掘の様子などから研究成果を説明し、土偶が何のためにつくられたのか、当時の生活からより深く考えさせた。前の授業の内容から、縄文時代の食生活を思い出させた。

謎の多い土偶について、根拠をもとに自由な発想をさせたい。考古学者のように、さまざまな説を自由に出し合っていく楽しさを大切にしたいと思った。心に残った1つの土偶から、土偶をつくった人々の願いを考えさせた。「子どものおもちゃ、身を飾るもの、女神としてお祈りする、病気やけがや災害の身代わり、死者と一緒に埋められたもの、宗教儀式の時のお祭り道具、お守り札などである。

<生徒が考えた説>

「土偶は、人間の顔に似ている。だから、『信頼している』という意味で、お守り札にしたと思う。自分に似せて、自分のお守りにした。」「病気の身代わりだと思う。病気とかしたら、口が開いているから吸い込んでくれそうだ。そこから悪いことが抜けていくと思った。」「土偶の右足がないものは、死んだ人も右足が悪かった。病気やけがをしたところをたたくと、治るという考えがあったかもしれない。」「大切にしていた人と一緒にいつまでも、いたかったのではないか、大切な人を土偶でつくってあげた。」「小さい子どもはお手伝いができなくて、母親が外に行って働いていない時間、遊ぶものがないので、母親の代わりにおもちゃとして女性の土偶をつくったのだと思う。」「子どもを産んだり、調理したりした女性に、きっと感謝の気持ちを込めた。」「まだ小さい子どもが死んで、旅立たせるのは心配だから一緒に作って埋めた。」「生きていたとき、母はこんな顔をしていたと、その残された子どもがわかるためにつくったのではないか。」「なぜ女の人の土偶が多いか、不思議に思っていた。女神だと思うと、自分のいちばん不思議なこのことに、いちばん合っていると思った。食料も安全かどうかわからない時代だから、どうか助けて下さい、という意味でお祈りしていたと思う。」「15歳くらいまでで死んでしまうと気の毒にと思って、埋めたんじゃないかなあ。」

3. **3時間目** 自分の「土偶をつくったわけ」説の発表

生徒たちの豊かな発想は、どこから来ているのだろうか。自分の日常の生活感覚から想像をめぐらす生徒たちに何度もはっとさせられた。縄文時代の人たちが聞いたら、何と言うだろうか？

おわりに

「あなたのやりたい授業は何ですか？」と問いかけられたらどうだろう？自分自身がやってみたい、という思いこそが、教師としての主体性を高め、教育の質を高め、次の新たな授業実践へとつながっていくだろう。そのために、教師自身が、時間的にも精神的にも、自由であり、教材と出会う機会を保障されていなければならないのは、いうまでもない。教師が出会って感動した「もの」や「こと」を、生徒ならどう受け止めるだろうか。また教師にとっての教材研究とは、生徒の驚きを、どこで仕組むか、にかかっているのではないだろうか。生徒の感受性に訴えかけ、好奇心と謎解きのわくわく感、ときには名探偵となって、事件を解決していく気分は、生徒にとっては格別の思いがあるだろう。